

私の引揚げ体験記

徳島県 板東 サツキ

一 朝鮮に渡って

私が、昭和二十（一九四五）年八月十五日に終戦の玉音放送を聞いたのは、朝鮮平安北道新義州府弥勒洞の府営住宅に住む、朝鮮国籍の君塚さんの家だった。

ラジオ放送は雑音がひどくて、とても聞き取りにくかったが、日本が戦争に負けたことだけは理解できた。

夫の俊治はひと月前の七月十日に召集令状を受けて、平壤の部隊に入隊していて、誕生日を過ぎたばかりの一人娘と二人だけの世帯だった。

私が新義州に行ったのは、夫が新義州刑務所の刑務官で、その官舎で暮らすことになったからであった。

私は、昭和十七年四月十五日に結婚するまでは、郷里の国立傷痍軍人徳島療養所（現在の国立徳島病院）看護婦養成所の第一期生で看護婦としての教育を受けて、

松山の日赤病院に配属されていた。松山日赤病院では十カ月間講習生として働き、以後三年余り働いて正規看護婦免状をもらったが、結局一度も看護婦として仕事はしなかった。結婚した四月末に、夫に連れられ新婚旅行をかねて新義州に向かい、到着後すぐに夫の兄格郎宅で旅装を解いた。私たちが住むために、兄格郎が所有する裏の借家の住人に家を空けるよう交渉を始めてくれたが、話は簡単には進まなかった。

兄格郎は、常磐町の道庁の近くで歯科医を開業していたのだが、朝鮮に渡ったのは大正時代だそうで、私が行ったところには府会議員も勤めるほどの有力者になっっていて、患者以外の人の出入りも多く、仕事の間にも何かと大変なようであった。

格郎一家の構成は兄と妻の喜久の夫婦と、子供がないので夫のすぐ上の惇吾兄を養子にしている、その妻の正子の夫婦、この夫婦の子供、和子と広の六人家族だったが、それに私たち二人が加わって八人の大家族になった。使用人は、技工士見習いの少年が一人いた。彼は朝鮮人で兄の家に住み込み、患者がいなるときは

奥の仕事の走り使いをしていた。

そんな家族構成で女中がいらない上に、喜久姉さんときたら来客のお相手をするだけで、家事には何一つ手をおろす人ではなく、一切は正子さんの肩に掛かっていた。その正子さんは九月に素子さんを出産した。そんな家庭に身を置いた私が、毎日見聞きすることは驚くことばかりで、特に喜久姉さんの日常生活は驚くばかりであった。姉さんは朝九時ころ起きてきて、正子さんが作った特別あつらえの朝食を食べる。食べ終わるや、きれいな着物に着替えて外出した。たまに家にいるときは、私たちの仕事に文句ばかり言っていた。私たちは、着いてすぐに裏の家を空けてくれて別居できるものと思ってきたのに、そんな気配など全くなく、月日はどんどん過ぎ去って行った。

日常生活が結婚前とすっかり変わった六カ月の間に、四キログラムも痩せて細くなったけれど、多分心身の疲れだろうぐらいに思っていた。正子さんに言っても、「私もそうであった」と言っていたので、別に気にもしていなかった。十月になって妹の美代子が新京

から来て、あまりの変わりようにびっくりしていたが、実家の父や兄に心配を掛けてはいけないと思い、口止めした。

そのうちに、惇吾兄に召集令状がきて応召し、年が明けてすぐに戦死の公報が入った。

二 一時の帰国

北国の春の訪れは遅い。冬物の洗濯、洗い張りで正子さんと二人で日々追われたが、正子さんは乳飲み子を抱えていたので、仕事の大半は私の負担になった。

以前から、私は自分の体がただの疲れでないことに気付き、検温していた。午後になると微熱が出た。結核に対しては三年間の勤務で抵抗力があるものの、体力が弱ればいつ発病するかもしれない危険性も持っていた。早いうちに休養しなければ取り返しのつかないことになると思い、夫に話して帰国を決心した。喜久姉さんは表だって反対はしなかったものの、例によって好意的ではなかった。しかし、私は今はもうそんなことに気兼ねはしなかった。行李いっぱい仕立物を土産に十八年五月十日過ぎの汽車で帰国した。下関ま

で義雄兄が迎えに来てくれたのには驚いた。

「グリーンピースの卵とじ」を車中で頂き、懐かしい故郷の味に思わず涙ぐんだ。内地の人たちは、疲れ切った私を温かく迎えてくれたが、別けてもお姑さんは「こんな体になるまでこき使い、おまけに養生に帰るあんたにあんなにたくさんの縫い物を持たすなど、いかにもあの人のすることじゃ。あんたや長岸の皆さんに申し訳ない」と言つて、まるで自分の責任であるかのように私に詫び、さらに「儉治も儉治じゃ！」と言つて怒つた。私はお姑さんに心配を掛けて済まなく思い、「お姑さん、気にしないで下さい。病氣になつたのは、勤めていたときと生活がすっかり変わつて、私の体がついていけなかつたためだから、しばらく養生したら必ず元氣になりますから」と姑を慰め、実家で養生するつもりであつたが、聖物の夫の言いつけなので、両方の家で世話になりたい旨姑に話して、許しを得た。落ち着いて間もなく、以前看護婦教育を受けた松山日赤の医務課長さんが、徳島市で開業している松崎病院で診てもらつたが、肺浸潤の初期との判断であ

つた。「早く気付いて良かった。二、三カ月養生すれば良くなる」と言われ薬をくれた。

別に処置はないので一週間ごとに通院、午前と午後二時間ずつは安静にして、他は起きて動いていた。病氣のことはだれにも詳しくは話さなかつた。勤めていたおりに看護婦が次々と静養していたので、自分には分かつていた。五十日ぐらいしてから微熱も出なくなり、安静時間を午後だけにして、午前中は持つて帰つた縫い物を広げてボツボツ始めた。当時役場に勤めていた須磨さんも、休日には手伝つてくれた。

三カ月ほど静養して投薬もなくなり、先生が一カ月後に来るように言われ、結果は良好で、病院通いは終わった。

九月中旬に新義州に帰る予定にして、それまでに縫い物を片づけた。姑は「格のうちでは女中もい着かず、自分で何もできない姉にすれば、あんたほど便利な人はいないので、家が見付からないのを口実に絶対離さないから、儉治が自分で見つけられなかつたら、内地に帰つて来るよう私からだ」と儉治に言いなさい」と再

三言つてくれた。そうして元気になった私は、五カ月振りに夫の待つ新義州に帰った。お姑さんの言づてを夫に話して、二人ともその心づもりでいた。

三 府営住宅での生活

年度末まで待たずに、年内に退職して帰国するつもりでいたが、十月に入って間もなく府営住宅にいた役所の同僚が、退職して内地に帰るので、よかつたら入居しませんかと話してくれたので、早速夫が兄の了解を得て入居が決定した。こんなに早く別居できるとは思っていなかったもので、とても嬉しかった。

昭和十八年十月の終わりに、弥勒洞の府営住宅に入居。姉がアルミの釜を一つくれた。他の必要な品は、近くの金物屋で最小限度求めた。内地ではもう自由に買えなかったが、ここではまだ衣料や家具は自由に買えた。私たちが移った府営住宅は、四軒長屋が二棟と一戸建てが四軒あり、それが一つの班になっていた。班長さんは同じ長屋の警察官で、格郎兄くらい年の配の方で、人使いの荒い人だった。四軒長屋の入居者は、刑務所に勤めている福沢・北岡・神平さんの三家に、

うちを入れて四家であった。皆さんはうちよりは四、五歳年上のようなであった。勤労奉仕、防空訓練には、班内で一番若かった私はいつも休まず出ている。長屋には各戸に水道はなく、二棟の中央に一カ所ある水道を共同で使用し、水槽に貯めるが、冬期には凍った水槽の水を溶かすのが一苦労であった。

長屋は各戸に三間あり、玄関二畳、座敷六畳、四畳半のオンドル部屋に、流しと横に水槽が付いた土間にオンドルの焚き口がある。オンドルの部屋に一間の押入があるが、荷物のない新婚家庭では、オンドルの部屋と土間だけで用が足りた。

当時夫の月給が手取り百円余りで、一カ月二人分の主食配給が十円を少し出るぐらいで、家賃がいくらぐらいたったか記憶がないが、生活費はどれほどもいらなかった。毎月余分は郵便局に預けていた。ポークスのおときには、お姑さんに百円送ってあげた。今と違って、お金を持つていても使うことができないからできていたけれど、やはり同じ長屋の刑務所勤めの人と

は親しみやすい。昭和十九年七月に裕子が生まれて間もなく、福沢さんに召集がきて新義州の守備隊に入隊されたが、二カ月も経たないある日、突然亡くなられたことを聞き、びつくりした。営内で腸チフスが発生、それにかかって死亡した由、お悔やみの言いようもなく、お気の毒に思った。就学前と三つぐらいの男の子が二人おられ、内地に帰国してから女の子が生まれたとのことであった。

いろいろの手続きを済ませて内地に引き揚げるとき、主人が当直の晩だったので、裕子をねんねこでおぶって、北岡さんと神平さんと一緒に新義州の駅まで見送りに行ったことを、はつきりと覚えている。次男の寧人さんは、私たちが高知にいたとき訪ねてくれた。奥さんとはずっと年賀状の交際で、お互い当時を懐かしみ思い出している。おじいさんが亡くなったとの葉書を出したら、過分のお供えを頂き恐縮した。福沢さんを見送ってほどなくして、神平さんに召集がきて平壤の部隊に入隊。奥さんは、二人の子供を連れ内地に引き揚げられた。

年が明けて二十年、今度はお隣の北岡さんが済州島の郊外作業場に長期出張することになり、子供さんのない奥さんは内地に引き揚げられた。高知県出身の方で、裕子をとても可愛がって毎日お湯に入れたりしてくれていたので、私はとても嬉しく助かっていたのに、奥さんがいなくなつて寂しくなり戦局の厳しさを感じるようになった。

そのころから、野菜を売りに来るニイヤンたちが「ニツポンワルイ」というのをよく聞くようになり、「ニツポンマケル、イツカワカラナイ」「オクサントチ、ワルクナイ」などとも言った。どんな事情でこの話がここまで流れてきたのかは知る由もないが、よほど日本軍に恨みがあるのだろうと思った。ある日、ボロをまとつたニイヤンの足元を見ると、素足に破れズックを履いていた。あまりに気の毒に思い、主人の履き古しだが繕った軍足を四、五足出して「失礼だけど、もし良かったら履いて下さい」と言つて出すと、「テンホ、テンホ」と言つてとても喜んで押し頂いて持つて帰つたので、思わず涙が出た。四、五日経つて、その人が

「オクサンアリガトウ、テンホテンホ」と言って足元をさす。見ると、軍足を履いて暖かいという。これ食べてくれと言つて、大豆を持って来た。とても貴重な主食なので、こんな大事なものは頂けないとわけを話す。と、ニイヤンの言うには履いている靴下をさして「コレ、トテモアリガタイ」と言った。大豆をもらつてくれないと靴下を返さなければならぬからと言つて「ソレ、ワタシカナシイ」と言うのには私もどうしようもなく、済まないと思いつつニイヤンのしたようにおし頂いて有り難うと頭を下げると、喜んで帰つて行つた。それにしても、私はちよつとした善意でした。とに、エビでタイを釣る結果になつてしまつたので、御礼のつもりでお金よりも衣類が良いと思つて、数少ない主人の下着を一組あげた。その嬉しそうな顔を見て、気持ちが楽になつた。

後年、宮尾登美子さんの「朱夏」を読んだ中で、新京に抑留中の人が、あまりの空腹に耐えかねて、ある日、日本人の社宅に干してあつた洗濯物の中からオムツ一枚をはずして、満人から饅頭一個と交換。幼い女

の子に少し食べさせて、残りの半分を自分が食べて、あとは使役に行つてゐるご主人に夜、床の中で食べさせた記事があつた。当時、中国の労働者は、衣料品がそんなにも求めにくかつたのかと、不思議に思つた。農家育ちの私は、両親や周囲の人たちを見て、ニイヤンのようなボロは着ていなかった。

北岡さんが出たお隣へは、高杉さんが引つ越してこられた。高杉さんは同じ刑務所勤務の新米さんで、年は主人よりは少し上のようであつた。出身は津山、奥さんが所長さんの姪で、内地の空襲が激しくなり伯父の勧めでこちらに疎開して来たと、奥さんが話しておられた。

まれに警戒警報が出ることがあつた。警戒警報が出ると、すぐに主人は出勤。私は裕子を行李に入れて、いかにも頼りない防空壕に運ぶ。寒さが厳しくなつてからは私も肝が据わり、どこにいても同じだと思ひ、主人が出た後はオンドルの部屋の押入に布団を敷いて、裕子を抱いて解除を待つていた。いつの場合も、すぐに警戒警報は解除になつた。

日が経つとともに防空訓練も回数が増え、裕子を一人寝かせたままで家を空けるのは不安であったが、どうしようもなく訓練に参加していた。訓練の時間が長いときなどは、裕子は一度目が覚めてまた泣き寝入りしたのか、耳たぶのくぼみに露を宿していたことがあり、思わず「ごめんねー、母ちゃんを許してねー」と言いながら、声を忍んで泣いたこともあった。戦時

下における子育ての一端が、今もしのばれる。ときどき常磐町の兄宅を訪ねた折り、そんな話をしたら、兄から「裕子一人置いてまで班の訓練に出る必要はない、班長が文句を言えば私が言ってやる」と叱られたこともあった。はいはいができるようになってから、班長さんに言って出席できない人の所へ裕子を連れて行って見てもらっていた。いつのころからか、内地からも北支の義雄兄からも便りが途絶えてしまった。

そのころの結婚式は、新郎は国民服にゲートル巻き、新婦はモンペという姿になった。生活物資は私のころとあまり変わりはなく、主食、酒、たばこなどは配給。砂糖は貴重品で、まれに少し配給があった。裕子が赤

ちゃんるとき母乳が足りなくて、米を宵に水に漬けておいたのを搗り鉢ですって重湯を作り飲ませようとしたが、甘味がないせいか、泣いて飲まなかった。かわいそうで、私も一緒になって泣いた。以後は、私の乳房をふくませる前の空腹のうちに、重湯を飲ませるようにしていたのを覚えている。

主人は当時、庶務課の文書係りで、月に二、三回当直があった。当直明けで帰宅すると、着ていた下着は全部脱いで、冬は物置に一晚置いて凍らせ、その他の季節にはたらいに入れて熱湯を掛け、蓋をしておいた。

シラミ

虱退治である。職員の中に朝鮮人がいたので、必ず一、二匹のお土産が付いてきた。この方法は、先輩の福沢さんが教えてくれたものである。

出張は年に二、三回で、行く先は道内と満州と半々ぐらいで、用件は事務の場合も護送のときもあった。満州に行ったときは、必ず今と同じようなカステラや和菓子を一箱頂いて帰った。当時朝鮮内では見る事のない貴重品であった。裕子が食べられるようになって

てからは、大半とっておき、残りを親しい人たちに分けて喜んでもらった。不自由を知らない今の人たちは笑い話になるかもしれないが、物の不自由な戦時下の庶民の生活の一端だった。

二十年七月のはじめに、主人が事務出張していた留守に召集令状がきた。平壤入隊は十日なので十分ゆとりはあったが、役所に届け、その足で常磐町に回って兄に知らせた。

配給で乏しい酒肴ながらも、皆様のお陰で無事賑やかな別れの宴ができ、ほっとした。同じ班から裏の木田さんのご子息も入隊。駅前での府の壮行会では、一緒に入隊する人がどれほどおられたかは全く記憶がない。夫を送って一カ月後には終戦などとは、夢にも思えばぬことであった。新聞の大本営発表は、いつの場合も「わが軍の損害軽微」であった。

私は内地に帰りたいが、主人も兄もこちらが安全だからいるようにとのことで、それを押し切つてまで帰国する勇氣はなかった。そして、十五日の終戦の日を迎えた。敗戦を聞いてから初めてしたことは、翌

日前原さんに誘われて闇市でお米を買って来て、白いご飯を腹いっぱい食べたことであった。

それにしても、闇市には昨日までの貧しい生活物資のなか、どこにこれだけの物資があったのかと不思議に思うほど、あらゆる品が揃っていた。

一週間ほど経った日の明け方、玄関をたたく音に驚き、主人が帰って来たのかと思ひながら出ると「板東さん！北岡です」との声に急いで開ける。「ご主人帰られましたか？」との問いに、「いいえ」と答えながら、とにかく座敷に上がってもらい、夜行で疲れているだろうと休んでもらった。その間に、私は朝食の用意をした。食後、北岡さんは役所に行かれた。その晩からは、我が家を北岡さんの宿に提供することにして、私は夕食をすますと、裕子と一緒に前原さんの所に泊めてもらうことになった。朝になると家に帰って朝食を作り、北岡さんと一緒にとった。北岡さんは食事が終わると、ゆつくり話をする間もなくどこそこへ行くと言つて出掛けられる。そんな生活が一週間ほど続いたころ、高村さんが来られ、北岡さんに「食事付きで部

屋を提供するので用心棒に来てくれませんか？」と頼みに来られた。高村さんの所は同じ府當住宅ながら一戸建てで、間数も我が家の倍はあり、ご主人は不在で若奥さんと子供さんとお姑さんという家庭であった。お互いにやましいことはなくても、世間の口に戸は立てられないので、北岡さんはこの申し出を喜んで受けて「奥さんお世話になりました。済みませんでした」と礼を言われて、高村さんの所に移られた。私もこれで安どし、高村さんに礼を言った。

八月二十五日以後のことだった。今ははっきり記憶にないが、ソ連兵が進駐して来た。今まで一度も行ったことのない場所へ、ソ連と朝鮮の小旗を持って班の人たちと一緒に出迎えに行った。ぼろぼろに汚れた軍服をまとい、生の人参や玉蜀黍をかじっている様子は

トウモロコシ

まるで乞食の行列のようで、あんなのに降伏したのかと思うと悔しくて、涙があふれてきた。家に帰ってから前原さんと、「関東軍は一体何をしているのか！」と日本軍の不甲斐なさをなじったものだった。

ソ連軍が来てから、各家庭に布団と腕時計の供出の達しがあった。

九月の初めに一人の復員兵が訪ねて来た。「役所の藤崎といいます。平壤のホームで板東さんと出会いました。板東さんの部隊は、これから南に移動するからと言われて、これを預りました。すぐ乗車とのことで、詳しく話を聞く間もありませんでした」と言つて、夫の名札が付いた奉公袋を渡してくれた。開けてみると、洗濯石鹼が一つと紙片に走り書きで「南に行く、心配するな！」とあった。

ある日の昼食後、リンゴをむいて裕子に食べさせていると、裏口からドヤドヤと大きな体のソ連兵が五、六人入って来た。私はびっくりして思わず裕子を抱き締め、盆に乗ったリンゴを差し出したが、見向きもせず押入を開けて口々に何か言っていたが、少しも分らない。私は生きた心地もなく裕子の頭に顔をつけてうつむいていたが、間もなくして何かわめきながら手を振って出て行った。思わず頭を下げた。すぐに隣のドアを開ける音が聞こえた。私は恐ろしさで震えが止

まらなかつた。「ああ！ 助かつた」。主人が守つてくれたのだと思わず涙が出た。

主人が昭和十四年に北支に出征していたとき、掃討戦の後には隊によつて略奪強盗が後を絶たなかつたが、主人は戦友の阿部君と、どんなときでもそれだけはないぞと誓い合つていたと話していた。また、民家に食糧を求めたときは、必ず金を払うことも守つた。「テンホ、テンホ」と言つて喜んでくれた。当たり前のことだがと言つていた。

そんなことを思い出していたら、隣の奥さんが血相を変えて入つて来られた。「自宅にはソ連兵が来ませんでしたか？」と言うので、私が「来たけど家は荷物が無いので、何かわめきながら出て行きましたよ」と話したが、お隣ではソ連兵がめいめい手当たり次第に略奪して出て行つたそうである。「どうしたら良いでしょうね」と問われたので、「一応、班長さんまで届けておいたらどうですか、世話会の方で占領軍に被害届を出すようになっていると末田さんから聞いていましたよ」と言つた。

そんなことがあつてから間もなく、高杉さんから役所の官服を返納するようにと知らせてくれた。翌日持つて行くと、明細書とともに三百円余りの現金を渡してくれた。これでもう役所にも用はなくなつた。兄が早く常磐町に来るように言つてくれたので、九月中旬に引越し、お世話になるようになった。

営業停止で歯科診察室の医療器械はすべて封印されていたが、その他は今までどおりで、まだ家族だけで生活をしていた。その当時は、同じ屋根の下に生活をしていたのは八人だったが、それに私たちが加わつて十人家族になつた。

四 抑留生活

しばらくは私たちが加わつた身内だけの生活であつたが、間もなく生田さんが同居するようになった。この方は池の谷出身で戦時中もよく家に出入りしておられて、私も知つていた。現地の人を使って、土木業の下請けをしていたと主人が話していた。兄より少し年上の方であつたが、温厚な方で主人のことも案じてくれて、ときどき話していた。十月の初めに、徳島

県人で郡守を務めていた木村さん夫婦が来られた。奥さんは体が大きくて元気そうな人なのに、ご主人の方はやせ細って髪は真っ白で、病人のように見えた。正子さんの話では、郡の長官であったために拷問に掛けられるなど、厳しい取り調べを受けて体が弱ってしまったが、ようやく釈放されてここに来たのだそうです。兄が薬を処方し、注射もした。翌日からは、毎日私が静脈注射を打ってあげた。木村さん夫婦は三畳の間で休み、食事はお粥を少しずつ奥さんが食べさせていた。

木村さんが少し元気になるにかけたころ、道庁の役人が二階を接収して荷物を運んで来た。朝鮮漬けのカメを三つも持ち込んで来て、納屋に置いた。朝夕の食事をするだけで、部屋の掃除は私が受け持った。「漬け物は皆さんも食べて下さい」と言ってくれたので、私も口にした。最初はなじめなかったが、食べ始めるとおいしくなり、かえって日本の浅漬けは味気なく思えた。木村さんが大分元気になられてから、娘さん夫婦と田舎で一緒に暮らすということで、出て行かれた。

昭和二十一年になって間もなく、今度はソ連兵の若

いのが三人入った。こちらは部屋の掃除と隔日に風呂を沸かすだけでよかった。初めての入浴のとき、沸いたことを知らせると、彼らは風呂場を覗いては駄目と追いやるように手を振った。蓋を取ってお湯の上面を指さして、浴槽の上までと手振りするので、水を足して沸かし直すと、ニコニコして両手を挙げた。あまり時間も経たないうちに、どこで手に入れたのか一人は黒の裾模様、一人は派手な長襦袢、もう一人は花模様の派手な着物を着て、思い思いの格好でニコニコしながら上がって来たのを見て、びっくりした。そのあと風呂場を見ると、お湯は少しも残っておらず、ガラス窓には氷の華ができていた。寒さのなか、お湯に入らずにお湯をかぶっただけで出て来たのであろう。生活習慣の違いを不思議に思いながらも、寒くないのかしらと案じたものだった。

もう一つ不思議に思ったのは、三人が外出したあと二階の掃除に行くと、いつもボロ布団が床の間と廊下の押入の上下に敷いたままになっている。正子さんと、座敷は使わないのかしらと話した。ある晩、兄が二階

に上がって行くと、広い座敷は空っぽで、布団を仕舞う場所で寝ていたと笑っていた。言葉が分からないのは不自由なので、正子さんと二人で日常必要な単語を一つずつメモして覚えていたが、帰国していつとはなしに忘れてしまった。若い兵士は陽気でいつもニコニコと私たちに接して、これが敵国の兵などという気持ちにはなかつた。給料が出た直後は三人で賑やかに騒ぎ、しばらくすると火の消えたように静かになる。兄は、金が入るといっぺんに使ってしまうのだろうと笑っていた。それでも、私たちに金や食べ物を要求することはなかつた。そんな平穏な生活が何カ月か過ぎ、寒さも和らぎ始めたある日、ボロ布団をまとめ、手を振って出て行つた。私たちも笑顔で見送つた。

「今度はどんな人が来るのかね」と話していると、四、五日経つて府の役人が来て「難民が大勢でその処置に困っているのです、空いている部屋にそれぞれ割り当てるから、家族は二階に上がるように」と言われた。慌ただしくすべての物を二階に運んだ。かつて私たちが休んでいた六畳間に兄弟婦と広さんが、八畳間の部

屋に正子さん親子と石川姉妹、私と裕子と生田さんの合計八人が寝ることになった。廊下の突き当たりの三畳の間には、いつのころからか知らなかったが、徳島県人で道庁勤務のご主人が応召中の三河さん親子三人が、部屋いっぱい荷物の中で生活するようになった。

階下には次々と人が入り、かつての診察室だけに立ち入り禁止の札がはられ、待合室、奥の三部屋もそれぞれ部屋ごとに異なる家族でいっぱいになった。待合室は広いので、何家族も入っているようで、その中にはかつての道庁のお偉方の奥さんがいる、と正子さんが教えてくれた。それらの大勢の家族が七輪で煮炊きをして生活していた。私たちはご飯を下のオンドルで炊き、おかずは七輪で煮て、できたら二階に運んだ。

ソ連兵が寒い間いたので、二階での生活は多分四月初ころからだつたと思うが、はつきり覚えていない。そのころから、兄は毎日のように日本人世話会に出掛け行つた。ある日、帰宅してから生田さんと六月ころから引き揚げが始まるようなことを話していたが、それはお流れになった。正子さんと私は姉さんの指図で、

毎日衣類をほどこいては帰国のときに必要なモンペやリュックサックを作った。一枚の着物を切らずに作るので、思うようにできなかった。

そんなある日、世話会から帰った兄が「サツキさん、日本から手紙がきたぞ!」と言って渡してくれた。実家の妹からのもので、封を切るのもどかしく読んでみると、昭和二十年六月に出したものだ。昨年春先から便りが途絶えていたのは気が付いていた。きつとこちらから出したのも届いていなかったのだろう。

どんなに気が焦り苦しんでも、どうすることもできない。時期がくるのを待つより仕方がない日々は、随分と長い感じがした。そうした毎日、二階は三河さんと私たち一家だけで、姉の気むずかしさには慣れていて、みんな黙ってしたがっていたが、階下は内鮮入り交じって大勢の同居なので、絶えずもめごとがあった。

新義州は他の地域に比して治安は良かった。若い婦女子の安全を守るために、水商売の女性たちがソ連兵の慰安をつとめて犠牲になってくれた。そのお陰を忘れないで下さい、とまだ弥勒洞にいるときに世話会の

人から言われていた。そして、暑くても「モンペを穿き、長袖を着て、一人歩きはせず、日が暮れてからは外出しないように、各自注意すること」と再三通達があった。慰安婦のことは引揚げの際もたびたび聞き、帰国してからも話のたびに、その人たちへの感謝の気持ち忘れずに手を合わせていた。

いよいよ帰国が決まったのは、九月に入ってからであつた。

五 引揚げ

待ちに待ったその日が遂にきた。私たち親子と生田さん、石川姉妹の合計五人が、昭和二十一年九月二十六日朝、兄の家から出発することになり、兄夫婦、正子さん親子は闇船を利用することにしたので、船の都合で一週間後の出発となった。食糧は各人が一週間分を携行した。私の班は四十人。子供連れの女性が多く、男性は生田さんより年上で、班長さんは五十歳前後かと思われたが、知らない方であつた。新義州から乗車の前に、駅前で荷物の検査があつた。所持金は三百円が限度、野宿に備えて用意した子守半天用のおくるみ

に、薄く脱脂綿を入れていたのはここで没収された。

見る影もなく傷んだ客車にすし詰めに乗せられて、平壤に着いた。何時間かかったか覚えていない。平壤からはトラックに乗せられ、デコボコ道をこれもどのくらい走ったかは定かでないが、降ろされた所は寂しい田舎で、班長さんが「みなさん！ここから開城までは歩きますので、そのつもりでいて下さい」と言われた。

野宿第一夜は川原であった。九月下旬の北朝鮮では、昼はモンペで汗ばむほどでも、日が落ちると急に温度が下がる。枯れ木を拾い集めてたき火を始めたので、私たちも拾って来て仲間に入れてもらった。一向は百人ぐらいに思えた。平坦な所に枯れ草を敷いて寝床を作り、裕子を寝かせたが、昨日までとすっかり様子が違うので「アアア、アアア」と星を指さしてなかなか寝ようとしれない。だっこして乳を含ませると、いつの間にか寝入ったので、私も裕子を抱え込むようにして横になった。千代ちゃんたち姉妹を傍から離さないようにしながら、生田さんが私たちを護ってくれるよう

な位置で寝ていた。翌日から行軍が始まる。私は二歳三カ月の裕子を背負ったの行軍なので、荷物は食糧のほか、ほとんど持てなかった。

休憩は、たいてい流れのある木陰を選んだ。流れの水でのどを潤し、各自水筒にも入れた。休憩時は裕子を肩から降ろして身軽になり、一息入れたものだった。でも、私など子持ちとはいうものの一人だけなので、楽な方であった。中にはおんぶにだっこ、そしてその上に五、六歳ぐらいの子を歩かせているお母さんもいたが、だれも手を貸す人はいなかった。班は女、子供に年寄りばかりで、たまに見掛ける若い男は病气持ち。元気な男性はほとんど召集されてしまっていなかった。どこを歩いているのか、少しも分からなかった。野を越え山を越えという状況で、生田さんに聞いても「知らないですねー」の返事ばかり。何日か寂しい田舎道が続いた。三日目の山の中で同じ班の三歳ぐらいの女の子が亡くなり、そこに埋めた。気の毒に思うけど、どうするすべもない。みんなで手を合わせて冥福を祈り、また歩いた。

ある朝まだ暗かったが、裕子にオシッコをさせていて気が付くと、足下に置いた兄の兵児帯で作ったおんぶの帯がない。物売りのオモニに盗られたのだと気が付いたが、すべて後の祭り。千代ちゃんの荷物の中から、裏地をもらって繋いで代用にした。

行軍中、一晩だけ屋根のある廢屋で泊まった。学校の講堂ぐらゐの広さはあつたが、無論どの何跡かも知らなかつたが、夜露を凌げるだけでも有り難いと言つたものだったが、その夜半に恐ろしいことが起つた。突然外が「がや！ がや！」と騒がしくなり、「暴動か！」の声にびっくりして、素早く裕子を背負つた。

どのくらい時間が経つたか、団長さんの声が講堂に響いた。「皆さん安心して下さい！ 村にちよつとした事件があつて、犯人がここに紛れ込んだのではないかと調べに来たのですが、疑いは晴れました」とのことです、ほつとして眠りについた。野宿のなかで一番集じられたのは、朝鮮人の暴動であつた。

こうして、行軍を始めて五日目の夜八時過ぎに、ようやく開城の引揚者収容所にたどり着いた。野宿で覚

えているのは最初の川原と廢屋だけで、他はどんな所であつたのか全く思い出せない。ポツポツと落ちていた小雨が、どうやら本降りになつた。班長さんも、足弱の一行を連れての道中大変な氣遣いがあつたと、一同有難うございましたと頭を下げた。広いテント張りの中に荒筵が敷かれ、一行が入るとすし詰めになり、筵一枚に四、五人休む状態で手足を伸ばすこともできなかつた。朝、決められた掃除をするほかは用が無いので、昼間、人の少ないときに手足を伸ばして休んだ。

ちもちこし

食事は、米軍支給の牛缶と玉蜀黍入りの粥が金杓子一杯であつた。裕子には、玉蜀黍でお腹をこわしては大変なので食べさせず、朝鮮人が売りに来るお握りやサツマイモを買つて食べさせた。出発のとき持っていた煎り米があるうちは、それをかじつてそんなに空腹を覚えなかつたが、それも無くなりおじや一杯では、さすがにお腹が空いてしんどい。檢疫のとき以外は暇があるので、着いて間もなくの日、子持ちのお母さんと一緒に三百メートルぐらゐ離れた所にある遊園地に行

った。ブランコや滑り台で遊ばせてやると、子供たちは大喜びであった。気が付くと、裕子には始めての遊びであった。十日間いるうちに、一度だけしか行けなかった。私が横になっている周囲をぐるぐる回りながら、「母ちゃん行こう、母ちゃん行こう」と催促されたが、ひもじい腹で歩くのが大儀で、唯一の楽しみを叶えてやることができなかつた。

幸い私たち一行百人余りのうち、一人も陽性の人が出なかつたので、翌朝、開城駅から仁川行き汽車に乗れるようになった。乗車の前に駅前広場でうどんの給食があつた。煮詰まつて汁気もない、まるでうどんのお粥のようであつたが、その美味しかったことは忘れられなく、裕子も喜んで食べていた。

無蓋車に乗って仁川駅で下車、ホームを進んで行くと、黒人の兵隊さんが私に近づいて来て、裕子の頬を撫でてカステラを一切れ握らせてくれた。私が「サンキュー」と言つて頭を下げると、「バイバイ」と手を振ってくれた。私の前にも子供さんを連れられた方が歩いていただろうにと思つたが、多分国に残してきた子供が

裕子と年格好がよく似ていたのだらうと思つた。

駅を出てどれほど歩いただらうか。美しい砂浜の海岸に出た。港ではなく海水浴ができそうな所で、船の姿は見えない。どれほどの時間休憩していたか。「船が見えるぞう！」とだれかが叫ぶ。よく見ると、遙か沖合いに大きな船がぼんやり見える。間もなく米軍の上陸用舟艇が来て、次々と私たちを乗せて沖の引揚船まで運んでくれた。高い梯子を登る怖さも忘れて、夢中で登つた。船では、日本人船員が引き上げてくれたのはつきり覚えている。引揚船は大きな貨物船で、船内では途中のどの乗り物よりもゆったりして、くつろぐことができた。乗船後間もなく、班長さんが乾パンを一袋ずつ配つてくれた。船長さんからの差し入れということだった。みんな喜んで口に入れていた。空き腹には何でもおいしい。風呂敷を広げた上に十個ばかり出すと、裕子は喜んでそれを動かして遊んでいった。私は横になつて手足を伸ばしていると、いつの間にかうとうとするが、すぐにまた覚める。裕子も幼心にやはり不安であるのか、何も言わなくてもそばを離

れないので、その点は安心していた。船内の食事は麦ばかりのご飯に味噌汁、沢庵、ときには野菜の煮物。

一度、鯖の煮付けが出たのを覚えている。麦ご飯のおいしかったことは、内地に帰国してからも忘れられなかった。夜はゆっくり眠ることができた。波静かな秋晴れで、とても穏やかな航海であった。

船に、ひどく疲れた様子の婦人がいた。髪はばさばさで着ている物は汚れきっていて、下着を広げては何か探している様子に、はっと気が付いた。虱しらみを取っているのである。きつと北の奥地から南下して来た人であろうと思い、向こうが気付かなかったのでこちらからも声を掛けずに通り過ぎた。

三日目の朝、私たちの団体の五、六歳の子供が亡くなり、水葬にされた。故国を目の前にし上陸を待たずに亡くなった幼い子が哀れで、行動を共にした私たちは甲板でその冥福を祈った。きつと、途中の行軍に疲れて体力が消耗してしまったのだろう。

その日の午後、私たちは佐世保に上陸した。そし

て、たくさん建ち並んだ元航空隊の宿舍という広い建物の一棟に入った。ここで二泊して、いろいろの手続を済ませたが、ここでの食事は三度ともサツマイモで、それに沢庵が二切れ付いていた。最初はおいしかったが、次第に残すようになった。帰る前日にくれた証明書を持って、各人で駅へ切符をもらいに行った。私は列車に乗るまでの間、引揚船が入港するたびに港に行つて復員兵に主人の消息を尋ねたが、すべて空しかった。

三日目にいよいよ南風崎駅から乗車した。車内は空いていて、裕子を肩から降ろし膝にだっこした。沿線の所々で、婦人会の方たちによるお茶の接待があった。下関までどれほど時間が掛かったか覚えていないが、乗り換えた山陽線が下関を発車するまでには、大分時間があつた。私は、有り金を全部はたいて実家に電報を打つておいた。始発駅の下関では早く乗つたので、五人は一緒に座ることができたが、発車するころには通路に座る人も出て、さらに次々と乗り込んで来るので、終いにはトイレに立つこともできなくなった。う

とうとうしていると、突然女の金切り声で「だれかあの女をつかまえて！」と叫ぶ声に目が覚めた。間もなく列車は動きだし、ホームには駅員も他の人影も見えなかった。女性は泣き声でぼそぼそとつぶやいていたが、大半の人は眠っていたので、近くにいた私には聞こえなかった。「汽車に乗ろうとしたときに女が寄って来て『子供さんをおんぶして大変でしょう。一つ持つてあげるわ』と優しく言ってくれたので、すっかり信用して荷物を預けたが、座って気が付いたらその女がいなのです。隣の男の人が『おぼさん、そりや常習じや、気の毒じやが諦めや』と言った。あれがなかったら子供たちが……」とまで聞こえていたが、やがて静かになった。私は眠れぬままに、敗戦後の生活の厳しさを垣間見る思いがした。帰ったら、裕子をお姑さんに見てもらって働きに出よう。そのうちに主人も帰還するだろう、と心に決めた。いつの間にか深い眠りに就いた。「母ちゃん、オシッコ！」の声に目が覚めたが、足の踏み場もないので仕方なくタオルを当てて、「シッコに行けないからこのままでしな」と言っさせてくれたものでした。

外はまだ暗く、夜は明けていなかった。

高徳線に乗り換えて、初めて窓外の景色が目に入った。池谷駅に降りたのが、昭和二十一年十月二十二日の午後だった。新義州を出発してから二十七日目でした。駅に主人と義雄兄さんがリヤカーを曳いて迎えに来ていたのには、夢ではないかと思うほどびっくりした。池谷のお姑さんは健在だったが、私の父は私たちのことを案じながら終戦翌月の九月十五日に亡くなり、その葬儀が終わった直後に義雄兄さんが帰還したとのことだった。

私が帰国したその晩は、主人は夜勤でこれから出勤するということで、私と裕子はリヤカーに乗って、姉妹が待っている実家に帰った。入浴して一カ月の汚れを落として、実家心づくしの赤飯を頂いてから床に就いたが、その夜から三日三晩眠り通した。家族は、私を起こしに来ても起きないので、そっとしておいてくれた。それでも、その間二、三度食事をしたらしい。格郎兄さん一家が帰国したのは、私たちより七日後であった。

六 あとがき

この手記は、私が先の太平洋戦争後間もないころ昭和十七年四月から終戦後内地に引き揚げられるまで五年間、外地で暮らした日常生活の記憶をたどりつつ綴った事実である。書き終わって読み返してみると、書きたかったことがたくさん抜けているのに気が付いた。

ソ連兵が進駐後五十日ぐらい過ぎて府内の警察官、刑務官はすべて出頭させられて、貨車で北に送られた。その中に作業課長の楠さんもおられたので、私もご家族と一緒に沿線で見送った。送られたのは永吉という所だそうです。

寒い間強制労働を強いられ、年が明けた二十一年三月に新義州に帰って来たが、発疹チフスで多くの人が亡くなり、主人の親友の早田さんも帰ってから亡くなられ、楠さんと一緒にお悔やみに行った。主人もこちらに帰っていたらどうなっていたか分からない。

主人は、光州で解除され、南朝鮮からの召集者と別れて、北朝鮮からの召集者は三十八度線遮断によって北上ができなくなっており、召集先の部隊と共に行動

するように再三説得されたが、どうしても新義州に戻りたく、五、六人の仲間と三十八度線突破を試みたが、どうしてもできないことが分かり、みんなは散り散りになった。そこで主人は、京城にいる刑務官教習所時代の同期生、今ヶ倉さんに世話になった。

今ヶ倉さんの奥さんは、終戦と同時に荷物をまとめて子供を連れて日本に引き揚げ、ご主人だけが残務整理で残っていたそうです。十日ほど世話になって、原隊に頭を下げて戻ったら、隊長以下みんなは「よう帰って来たな！」と温かく迎えてくれたとのことでした。二十年十月に、釜山から鳥取の境港に上陸したが、北朝鮮などからの復員者と違って軍の物資をたくさん交付されていて、持ちきれなくなり捨てる人があり、またそれを拾う人もありで、釜山港はごった返していたそうです。

主人も辛抱できずに、米を半分ほど他人に分けたとこのことを家で話したら「どうして持って帰らなかつたの！」と言って怒られたと言っていました。池谷でもそれほど食糧に困っていたのです。

実家に落ち着いてから、裕子を連れて川向うの亡母の実家にあいさつに行きましたが、叔父夫妻は健在で「よう裕子も無事に連れて帰って来たなあ！」と泣いて喜んでくれ、「親父さんが、あんたたちのことをどんなに案じていたか。わしがいつ行つても、あんたたちのことを話していた。あの世で母さんと二人で、喜んでお前たちを見守ってくれることだろう」と言つてくれた。

父は、昭和十八年五月に帰国したときは、あんなに元気であったのに、わずか二年後に亡くなるなどとは考えも及ばぬことであつた。

もう一つ、不思議に思うことは、新義州を発つときから一緒であつた生田さん、石川さん姉妹の面影が全くなく、裕子を背負つた私独りしか浮かんでこないことである。生田さんたちと一緒にあつたことは、とても心強く有り難いことであつたのに、不思議でならない。

抑留生活中に無事に生活できたのは、ひとえに格闘兄さん一家のお陰であり、今も忘れずに有り難く感謝

している。

引揚げの時期にも恵まれていたと思う。初秋であつたので身軽で、徒歩や野宿にも耐えられたが、特に道中一度も雨に遭わなかつたことは、何よりも幸福であつたと思う。

二人の幼な子が犠牲になつたことは何とも痛ましく哀れで、同じ年ごろの子供を連れていた私には忘れられない悲しいことで、思い出すたびに涙が出て止まらない。

「抑留？ 引揚者？ ってそれは一体なに？」といぶかる人も多いとか。それほど、忘れられた遠い過去の出来事になつてしまつた今、息子に勧められたが、当初はとても書けるものではないとためらつていたが、年が明けて寒くなり、毎日炬燵で退屈をもてあましていたとき、思い直して書き出してみると、これらのことは今なおはつきりと記憶に残つていた。

無理せず気の向くままに、ありのままを書きました。振り返つてみるに、終戦から故郷に落ち着くまで、わずか一年三カ月のことだが、どんなに長く感じた

日々であったことだろう。

兄さんたちをはじめとして、お世話になった多くの
人々のご冥福を祈りつつペンを置く。

合掌

